浅野氏広島城入城400年記念リーフレット　第5巻

学問・教育の普及と寺社政策

浅野家家紋

浅野氏の学者登用

江戸時代前期は、藩政を担う大名が必要な知識や教養を身につけるために、高名な儒学者や兵学者を侍講とし、学問をすることが多く行われていました。

浅野氏は広島へ入部する以前から学問への関心が高く、初代藩主・浅野長晟は、兄の幸長にも仕えた堀杏庵を登用していました。堀杏庵は近代儒学の祖と言われる藤原惺窩の弟子で、江戸幕府の最初の幕儒となった林羅山と同門です。長晟と共に広島へ移ったものの、元和8年（1622年）に尾張の徳川義直の懇望により尾張藩の藩儒となりました。広島から堀杏庵が去った後は、同じく藤原惺窩に学び、軍学にも秀でていた石川丈山 が客臣待遇で2,000石もの大禄を与えられて登用されました。

堀杏庵画像（『広島市史』第一巻より）

石川丈山の致仕（辞職）後、二代・光晟によって京都の儒医・黒川道祐が招かれ、藩命により寛文3年（1663年）に、地誌『芸備国郡志』を編纂させています。また、光晟は京都の儒者・堀立庵（杏庵の長男）も登用しています。堀家は、堀立庵の孫の堀蒙窩・堀蘭皐の代から「北堀」「南堀」の二家に分かれますが、それぞれ京都在住のまま浅野氏に仕えて、藩主と世子（世継）の教育に当たりました。

世子時代から黒川道祐の教育を受けた三代・綱晟は、学問への関心が高く、歴史上の人物を仁厚・忠義・英雄・敏捷・貞節・雑品に分類し、幕府儒官の林鵞峰に解説・編集させて『本朝人鑑』を作らせています。

浅野氏の文教政策

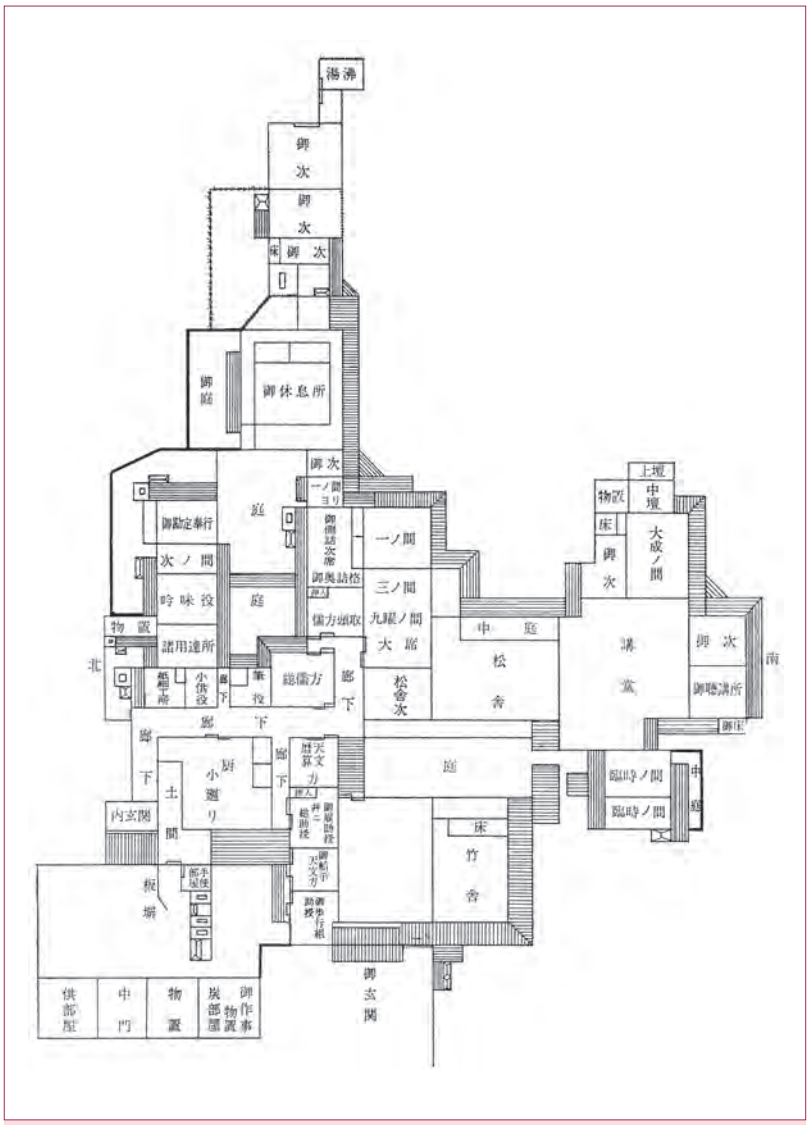
17世紀後半から18世紀前半にかけて、経済の発展とともに社会も変化していき、従来の武断的な支配では現実に起こる問題に対処できない状況となっていました。武士階級の権威を保持し、社会的秩序を保つため、学問による藩士の意識改革や人材育成に関心が持たれ始めました。

広島藩では、四代・綱長の時代に津村宗哲・味木立軒（朱子学派）や、植田艮背（闇斉学派）、五代・吉長の時代に味木門下の寺田臨川が登用され、こうした儒員たちが家塾を開設し、武士や庶民への修学が奨励されるようになりました。

五代・吉長の時代から、組織的な藩士教育も始まります。吉長は稀に見る好学な藩主であり、学問だけでなく軍学や詩歌にも関心を広げ、多くの自筆の著述を残しています。吉長はそれらの学びを政治に生かすことを心掛け、その一環として藩士教育に力を入れていました。また吉長は、家臣団に古文書や系図を提出させ、それをもとに臨川に『諸士系譜』を編纂させ、完成すると厳島神社に奉納させました。しかし、残念ながらこの『諸士系譜』は所在が明らかではありません。

正徳5年（1715年）、吉長は近習（きんじゅ）や児小姓の希望者を対象に毎月5日・25日の定日に、植田艮背に『孟子』の講釈をさせることとしました。以後、他の藩儒たちにもこうした月次（つきなみ）講釈をさせ、藩士の聴講希望者の出席を許すこととしています。

享保10年（1725年）には、広島城下白島の諸芸稽古場に漢学教場である講学所を創設し、寺田臨川に教育を担当させました。講学所の詳しい教育内容については明らかになっていませんが、享保12年（1727年）に教育による藩士の風儀改善の成果をあげたことで臨川が褒賞をもらっており、一定の教育効果はあったと思われます。講学所は、享保19年（1734年）には「講学館」と改称され、臨川による学規三則が制定されたものの、度重なる飢饉などで藩財政が次第に厳しくなり、寛保3年（1743年）、経費削減のため、開設から20年足らずで閉鎖されることとなりました。城内で行われていた月次講釈も廃止され、藩儒の寺田臨川らは再び家塾での教育を命じられました。



広島藩学問所見取り図（『広島県史』近世2より）

その後、広島藩には藩による教育機関がない状況が続きましたが、七代・重晟（しげあきら）の時代に再興されることとなります。天明元年（1781年）、頼春水（らいしゅんすい）により教育の基本となる学制が作成され、天明2年（1782年）に、城内二之屋敷に学問所が創設されました。教授は、学派偏重を避けるために朱子学の頼春水、闇斎学の植田含翠（がんすい）・加藤定斎（ていさい）・金子楽山（らくざん）、古学派の増田来次、古学折衷派の香川南浜（なんぴん）らの諸学派の学者が登用され、講釈や会読の会頭、詩文会の添削等を務めていました。しかし、次第に教育方針をめぐって学派間で教授や子弟が対立するようになったため、藩は天明5年（1785年）に学問所の教育を頼春水が主導する朱子学に統一しました。これは、寛政2年（1790年）の「寛政異学の禁」より5年も先立つものであり、幕府や諸藩から注目されました。

学問所の建物は、城内三之丸にあった約3,000坪の二之屋敷を改造したもので、「至聖先師孔子神位」の木主を祀る聖廟、講堂、御聴講所、東堂（後の松舎）・西堂（後の竹舎）などがあり、明治3年（1870年）に漢学・洋学・国学・医学を統一した「修道館」が八丁馬場に設立されるまで、開設当初と同じ位置・規模で存続していました。「修道館」は翌年、廃藩に伴い閉鎖されましたが、旧藩主の浅野長勲（ながこと）が浅野学校を開設し、新校舎を温知館と名付け、明治14年（1881年）に旧藩校教授・山田養吉（十竹（じっちく））を校長に迎え校名を「修道学校」としています。明治19年（1886年）に中学校令が出され、その影響で浅野家が手を引いた後、養吉が自邸で「修道学校」を引き継ぎ、現在も中区南千田西町に私立修道中学校・修道高等学校として存続しています。

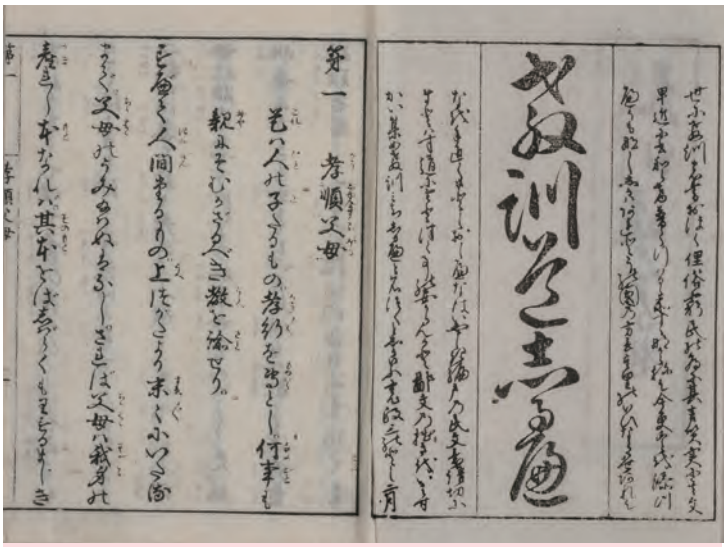
学問の広がり

藩立の学問所は、陪臣（ばいしん）（家臣の家臣）が講釈を聴講することは許可されていたものの、学問所に入学することはできなかったため、多くの家臣を抱える家老や上級藩士の中に、独自の学問所を創設し、家臣の教育をするものも現れました。

家老・上田安虎は、宝暦年間（1751年～1763年）に広島城内の私邸に講学所を開設したと伝えられています。開設当初は、古学で知られる福山鳳州（ほうしゅう）が教授となっており、講学所では古学を教えていたと思われますが、天明の初め頃に、古儀学者の山口西里（さいり）が儒員に登用されているため、当時の藩と同じく、一つの学派にこだわらない教育方針であったと考えられています。また、三原浅野氏は文化13年（1816年）に朝陽館を設置し、文政2年（1819年）には、三原在住の家臣のために、三原城二の丸内に明善堂を創設しています。

庶民の学問に関しては、藩は日常生活に必要な読み・書き・算術（計算）の能力を修得することを奨励しているものの、庶民のために教育施設を設立するということはほとんどありませんでした。庶民の教育には、寺子屋・家塾・私塾等がありました。寺子屋は読み・書き・算術が主でしたが、女子に諸礼や裁縫を教えたところもありました。教材には、日常生活ですぐに役立つ内容のものが使用され、地域独特のものもあります。広島藩のみで使用されたものでは、「広島状」や、寛政年間（1789年～1800年）に藩が印刷・発行して町村役人に配布した「教訓道しるべ」があります。天保以降、寺子屋は庶民の学習意欲の高まりとともに幕末まで増え続けました。

家塾や私塾は、寺子屋での教育よりも高度な教育を行う場で、藩儒が許可をもらい、私邸で教育を行うものを家塾、民間の学者が開設するものを私塾と区別しています。私塾は武士や農・商身分、医師や僧侶・神官などが開き、寺子屋同様に天保以降、急増しました。



「教訓道しるべ」（髙橋家文書）〔広島県立文書館所蔵〕

広島藩の学者と医者

18世紀の中頃になると、藩内からも学者が登場し、教育を行ったほか、学識をもって全国的に名が知られる学者を輩出するようになります。

朱子学では、竹原から頼春水が世に出ています。頼家は竹原で染物を扱う紺屋を営んでいましたが、春水は父の指示により学問で身を立てることを志し、京都で遊学し、朱子学者として頭角を表しました。天明元年（1781年）に藩儒に登用され、学問所の創設・運営に関わりました。また、弟の杏坪とともに『芸備孝儀伝』の編集に従事していました。春水の長男・頼山陽は、脱藩により廃嫡になりますが、47歳の時に完成した歴史書『日本外史』は没後に出版され、多くの人に影響を与えました。

医学では、浅野氏が他国から高名な医師を藩医として召し抱えたほか、町医からも藩医を登用しており、それが広島藩の医療の礎となっています。その専門分野は伝統的な漢方医学が主で、広島出身の吉益為則（東洞）が古医方を唱え、のちに日本の漢方学を確立しました。また、その友人であった恵美三白も劇薬を調合して医効を高める方法で有名になり、越前の奥村良竹が創出した「吐方」を用いた医療に成果をあげたことでも知られ、安永7年（1778年）に藩に召し抱えられました。

当時、勃興しつつあった蘭方医学では、広島の町医者であった星野良悦が、広島蘭方医学の先達とされています。良悦は、臨床医療において骨格が重要であることを認識し、寛政3年（1791年）に藩の許可を受け、受刑者の解剖・研究を行いました。その後、原田孝次という工人に依頼し、木製の人体骨格模型を製作しました。この人骨模型は、『解体新書』で知られる杉田玄白や大槻玄澤に激賞され、「身幹儀」と命名されました。その後、良悦は再び原田孝次に依頼して二体目の模型をつくり、寛政12年（1800年）に藩を通じて幕府医学館へ献上しました。献上された木骨は焼失したと考えられていますが、もう一体は、明治以降、広島藩医の家柄である後藤家が所蔵し、第二次世界大戦中は後藤家の薬草園日渉園に疎開してあったため、原爆による焼失を免れました。良悦は、この「身幹儀」の解説を記した「身幹儀説」を著しています。

頼春水肖像画（杉ノ木資料）
〔提供：広島県立歴史博物館（頼山陽史跡資料館）〕

身幹儀（星野木骨）
【重要文化財】
〔広島大学医学資料館所蔵〕

寺社政策

広島では毛利氏の時代より、浄土真宗寺院とその門徒（安芸門徒）が多く、大きな勢力となっていたため、領主は特別の配慮をしていました。毛利氏に代わり広島へ入った福島氏は、17の真宗寺院を現在の広島市中区寺町付近に移し、西本願寺広島別院の前身である仏護寺（ぶつごじ）を中核とする体制を組織し、浅野氏もこれを引き継ぎました。

浅野氏が入部した当初の寺社政策は、幕府の法度や触達に則したもので、福島氏のような寺社領の没収や再配分といった厳しい施策は行いませんでした。浅野氏は信仰する寺院を、広島で創建し保護しています。浅野氏とともに紀伊国から広島へ移転した寺院も多く、紀伊国から連れてきた僧を従来の広島にあった寺院の住職としたものもありました。

国泰寺　〔広島市公文書館所蔵〕
現在は、愛宕池を残し、己斐に移転している。

国泰寺は、福島正則の弟である普照が住職となっていましたが、その引退後は浅野長晟とともに紀伊国から入国した全宋が住職となり、浅野家の菩提寺となりました。また、明星院も福島正則が伊予国の僧を住持させていましたが、浅野氏が入部したとき、和歌山愛王院の僧である秀海を招き、住職としました。明星院はその位置が城鄣艮（うしとら）（北東）の方向であったため、鎮護の祈祷所（きとうしょ）と定められていました。

神社では、広島東照宮が二代・光晟の時代、正保3年（1646年）に造営に着手され、慶安元年（1648年）に遷座されています。これは、広島の地に光晟の外祖父である徳川家康を祀る東照宮を迎えるという意味だけでなく、岡山藩主・池田光政によって正保2年（1645年）に行われた、遷宮の式典にならったものであり、幕府に対する忠誠や領民に対する権威の象徴として、多額の経費を費やした大事業でした。

広島東照宮　〔広島市公文書館所蔵〕
かつては猿猴橋筋まで参道桜並木が続いており、第二巻で紹介した「広島城下絵屏風」や江戸時代の絵図にもその様子が描かれている。

また、饒津（にぎつ）神社は、九代・斉粛（なりたか）が先祖長政夫妻のために、天保5年（1834年）に建立に着手し、翌年竣工しました。城の東北鬼門を守る社として藩主の崇敬を受けています。

Topics（トピックス） 浅野図書館

浅野図書館〔広島県立文書館所蔵〕

浅野図書館は、広島藩最後の藩主・浅野長勲が大正9年（1920年）に、浅野長晟入城300年を記念して建設を発表し、大正15年（1926年）3月に小町に竣工されました。

昭和6年（1931年）に広島市へ寄贈され、広島市立浅野図書館と改称しました。当時、約9万冊の図書を所蔵していましたが、そのうち疎開していた一部の貴重資料を除いて、昭和20年（1945年）の原子爆弾の投下によりすべて焼失してしまいました。

戦後は昭和21年（1946年）に業務を再開し、昭和30年（1955年）に国泰寺町に新館が建設、その後、昭和49年（1974年）には現在地である基町に新築・移転し、広島市立中央図書館として開館しました。

現在浅野家から寄贈を受けた和漢の古書・図記類のうち、疎開により原爆の被災を免れた約1万点の資料を広島市立中央図書館の特別コレクション「浅野文庫」として所蔵しています。

第6巻予告　テーマ「文化・芸術の振興、祭礼・芸能・娯楽」発行まで今しばらくお待ちください…

令和2年（2020年）
3月発行

編　　集：広島市市民局文化スポーツ部文化振興課　TEL082-504-2851
監　　修：中山 富広　広島大学大学院文学研究科教授
協　　力：公益財団法人広島市文化財団広島城
広島市立中央図書館
西村 晃　広島県立文書館（エルダー）
修道中学校・修道高等学校
主要参考文献：『広島県史』近世１、『広島県史』近世２、『図説広島市史』